569-32
1200501516991
9
32
○複写

宮保庵千宗守宗匠著

常識としての

茶道の理解

大阪時事新報社

官休庵　千宗守宗匠著

常識としての

茶道の理解

大阪時事新報社

昭和二・八・内交・帝圖

569-32

序

近來のいちじるしい御茶の隆盛につれて、茶道とはどんなものかと云ふ注意を、一般の人々にも引かれてゐるやうに思はれます。

しかし四百年以上も、歴然とし て存在する理由を考へ、我々國民

の生活と何ういふ關係があるかといふやうな事には、考へ及ぼされてゐないやうです、多くの人々には無用な手藝道樂、奇怪な趣味、又は極端に奇妙なものなどとして解されてゐることを、屢次見聞いたします。

元より茶道の具體的な知識は、

實際に臨んで研究するより他に方法は御座いませんが、文字によつて一般の人々に茶道とはどんなものかといふ概念的な知識を、今日諸般の事に關して有してゐらるゝ常識の一項目として、是非持つて頂きたいとの望みから之を書き試みたのであります、大阪時事新報

の爾三年來の責を果たして、先頃同紙上に掲載したものを、再び册子にとの事で　今少し増補訂正をとも思ひましたが、不取敢、元のまゝで出す事になりました

昭和二年如月

紀元節の日之れを書す

著者

目次

緒言……一
今日までの茶道の見方……二七
現今の茶道の見方……四一
(一)行儀作法……四四
(二)交會法……五五
(三)閑作業……六三
(四)誇示的表章……七五
(五)學問……八五
(六)道德……九四
(七)藝術……一〇七
(八)禪……一二五
常識としての茶道……一四一

著者　官休庵千宗守宗匠

口繪寫眞
著者 千宗守宗匠肖像
茶室 官休庵
官休庵傳來の手水鉢
茶室 環翠園
園内傳來の石橋
半 實 庵

著者　千宗守宗匠自像

口絵寫眞

著者　千宗守宗匠自像

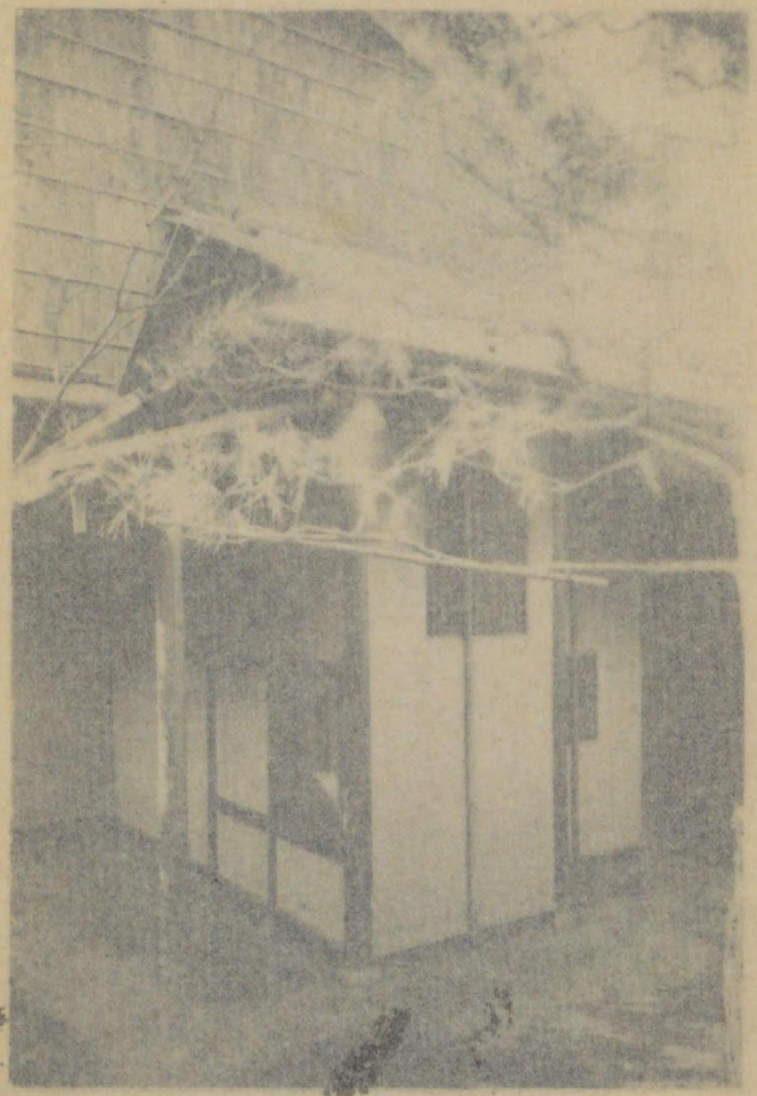
茶室　官休庵

官休庵傳來の手水鉢

茶室　須翠園

關内傳來の石燈籠

中置　庵

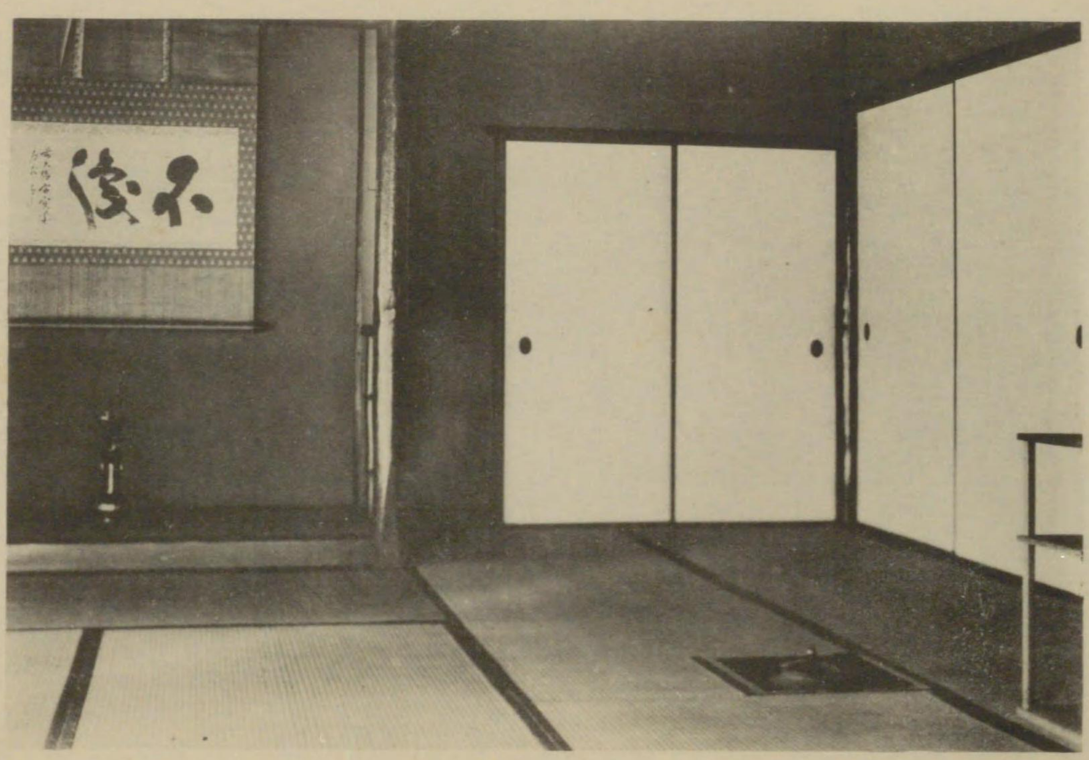


茶室　官休庵

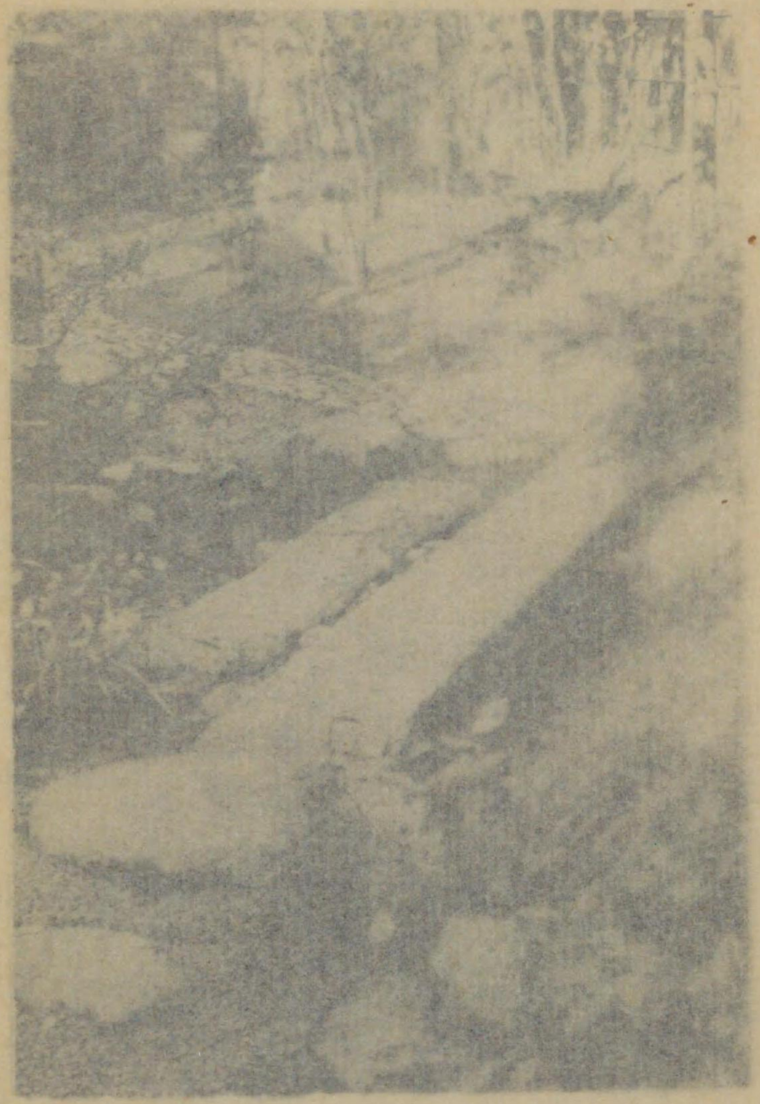
茶室　官休庵

指水手來傳尾休言

官休庵傳來　手　水　指

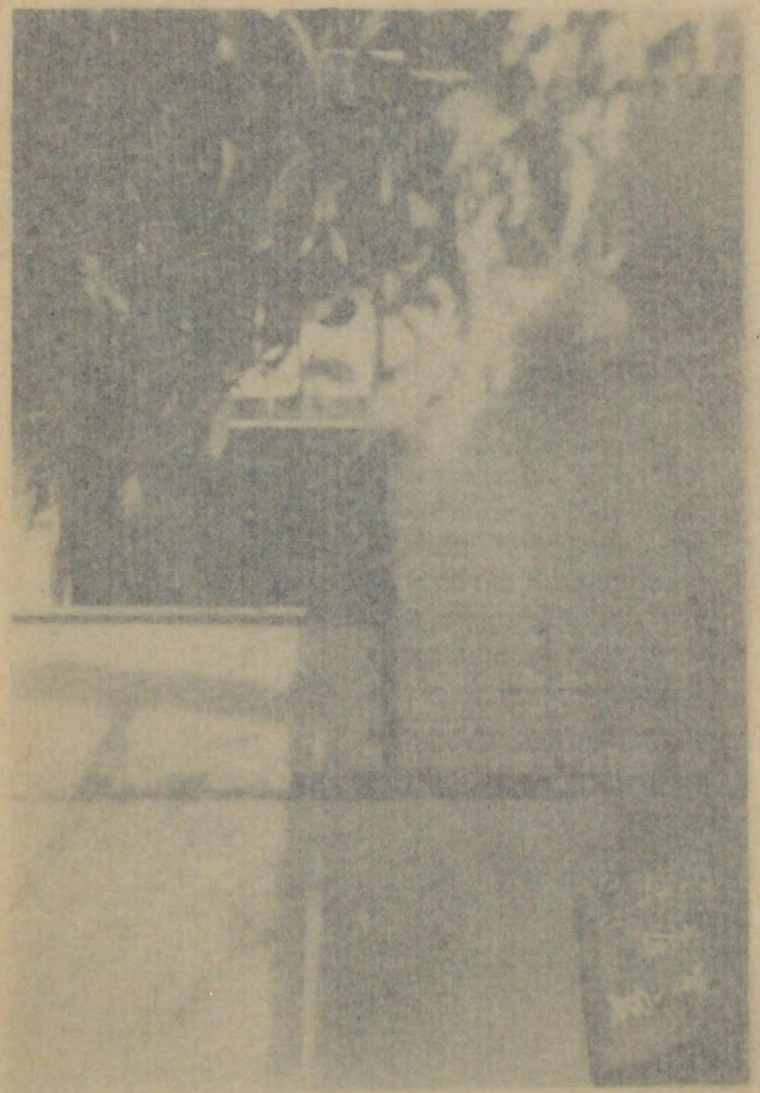


茶室　環翠園



宮休庵傳來の　石橋

官休庵傳來の　石　橋



庵 寶 牛 馬 茶

茶宝半寶庵

常識としての

茶道の理解

官休庵　千宗守

緒言

初めにお断り申上げておきたい事は、私は三千家の一たる官休庵の家職を繼承してをりまし

て七八年以前より專ら家風の發揚に勵みつゝあるものでございます、しかしながら私は、只だ此家職としての定められたる事丈けをやる以外に、今日の社會の狀態をすこしでも視まするならば、茶道に就ても色々と深く考へさせられなければならない

事が非常に多いのを感ずるのであります、そこで此の考へさせられる色々の事柄を、定められたる家職としての範圍より出でて、廣く茶道と云ふ方面から觀て、卽ち一般の茶道研究者の一人の立場からとして申し上げ度いと思ふのです、何故となれば

私は未だ〳〵茶道と云ふものを深く研究し、深く凝視し、深く考察する必要がある爲めに、尚數年の歳月を與へられたく、只今言ふ處のものを直に家風と推斷せらるゝ事を恐れるからであります。

卽眞理としての探究がなほ未

熟であるが爲めに、家風として
は或は他を誤まり、又導くこと
を恐れるからであつて、啻に考
へ得た事を申し述べて、大方の
是正を俟ち、斯道の深き探求と
向上を求めたいからであります
抑もの起元を問はず、我國に
於て創造發展せられ、三百年以

上の間を經て今日に至るまで、
なほそれを續けて來てゐるもの
、内、宗教、音樂及び茶道は、
純粹日本と云ふものを表はして
ゐる點に於て最も尊重すべきも
のでありまず、勿論是等各々の
効能が只單に純粹日本と云ふ要
素のみではないが、今

日に於て最も我等を不知不識の
間にも力強く我等を引き寄せて
ゐる點は、この事が大なる力と
なつて居る事を見遁がせない。
今、是等三つのものに、深き
理解を有せざるものが、外觀的
に之れ等を觀察する時は、例へ
ば今日の佛教は、衆生濟度の力

と云ふものが、實際どの程度迄深き働きを爲すかといふ事は、近頃問題とされてゐる處でありどうも昔日程の大慈悲がない樣に思はれてゐる、又邦樂の內でも例へば謠曲の如き、古い歷史をもつものは、今日でも隨分盛んに行はれてゐるが、然しどの

程度迄現代の人々の音樂藝術の感受性を滿足させるか、眞に聽く人の胸に盡きざる生命を呼び起すか、となると、之も一寸疑問のやうに思はれてゐる。

次ぎに茶道も、此處十年程以前より、非常の流行となり、大都會は固よりの事、僻遠の處ま

でも、隨分數寄者が行き亘つてゐる樣になり、それにつれて道具類の入札などへも人々の耳目を驚かすやうなのが、頻々行はれる次第となりました、しかしこれも實際は、現代人の藝術慾、又は道德慾などの眞の慾求からして、此道に入つて、充分の滿

足を得て居るかどうかと云ふことは問題である、そして何れも皆保存するといふ處に、價値があるのではないかと考へられてゐます。

そうして來ると、今此二者はどうもいづれもがよく其本質として有して居る處の安心なり、

樂的滿足なり、又美的滿足なりが現代の人心の慾求に應じてゐるとは思へないに關らず、なほ其生命を失はずして依然、今日衰勢を見ないのは何故であるかと云ふ疑問が起つてくるであらうが、之は卽ち初めに申しました純粹日本と云ふものが、大き

な働きをしてゐる爲めであると思ふのであります。

此の純粹日本とは、長い間の思想なり、風俗習慣なり、道德なりが、祖先によつて許容せられたもののみが凝結して出來上つたものであつて、我等が日本人である限り失はうとしても失

ふ事が出來ず離れやうとしても
離れる事が出來ず、實に我等の
脈間の底深く、しみ込んで居る
精神、觀念であります。しまして或は一
時の眩惑により忘却して居る時
があつても、直に自然と此の故
郷の溫か味に返つて來なければ
ならないやうになる、精神界の

誕生地であります。
長い間、歐米の文物思想を休
む間なく非常な勢ひで吸入致し
まして、其結果よい方面では我
國を今日の隆盛と體裁とに築き
上げましたが、悪い方面では從
來の我國の美點も何も、一時傍
らにあづけられたが爲に、思想

の混亂、惡平等など、現代のいづれもが安心愉快の生を實現する事が出來ない始末となつて來てゐます、これは直接に西洋のものを讀む人も、讀まない人もみないろ〳〵な方面から影響をうけて、斯う云ふ傾向になつて來てゐるのであります、併し我

等が純粹日本と云ふ故郷を思ひ慕うて、何時でも此處へ歸る事が出來るならば、滾々として盡きざる生命の泉に容易くひたる事が出來るであらうと確信するのでございます。

併し此泉へ出て來るには、如何なる道を步むべきか、又如何

にして導くべきか此事が初めの三者各々が大に考慮すべき重要の點であつて、其の人を得るといふのは第一の事ですが、實質的にはその外觀と理解とは大に之れに關係する處であります、法に悖らずして、現代人が見て如何にも好ましき外觀や形式を

有する事は必要であります、此點は三者いづれも大に工風實現せなければならない處である、しかし、此れにもまして必要なのは、其理解であつて、正しき理解を得てもらふ事は、今日の急務であらうかと思はれる。

三百年以上、見られ、聞きな

れ教へられて、自然の如くに心の底にある事も、我國では多くの點に於て、平面と立體との相違ある西洋の文物や、思考の方法やらの爲に一時下積みにされてはゐても、よく理解せらるゝならば此の暖かい故郷に歸り、自我の本當の覺醒が出來るであ

らうと信ずるのである。

仍で茶道に關しての理解はどういふものであるかを、之れから考察して見たいのであります

茶道は其關係する範圍が非常に廣いが爲に、ほんのその一部分を視て、これが茶道であるかと考へられて來てゐるのであり

ます、例へば所謂御手前丈けを以て、茶道の全部であるとか、又道具類の鑑賞を以てするとか或は又六ケ敷い其精神生活をのみ以て、その全部とするとか、色々でありますが、茶道は此れを以て一つの獨立したる道であ る事を知らないで、いづれも其

一面をのみ觀られてゐる有樣です、そして一般には、此人生生活に於て、非常に輕微なものとして考へられ、此れには一生の内觸るゝ事なくとも、何らの不自由がないと思はれてゐます。

しかしこれも皮相の見であつて、我等の物的及び精神的生活

を諧調ならしめ、ごういふ階級に應じても圓滿に始末せられ、滿足なる生を享けるには最も必要のものの一つである事は、多く知られてゐないのでありますごうしても今日迄は、上下善惡の兩極端に考へられてゐる始末であるが、さういふ事でなく中

庸な、穩當な一般解釋として、卽ち常識としての茶道に對する理解を持つて頂きたいのを切に望む次第でございます。

今日までの茶道の見方

社會諸般の事項の中で、茶道は一體ごういふ位置を採るべきであるかは、一寸六ケしい問題であつて、尙々吾等はこれが向上と共に大に考慮を要すべきであるが、昔からよく決定されてはゐない樣に思はれる、先づ他の香、花と共に遊戲と見らるゝ

ことは、最も多い樣であつて、好古類纂、學藝志林や古事類苑等にも、皆この遊戲の部、又雅遊の部等に入れられてゐます、これは極く大體的に外見せられた見方であつて、さう云ふ方面は扱つてはゐるのではあるが、さう斷定せらるゝ事はあまりに

輕く見られてゐる恨みがある

勿論この今日迄の遊戯といふ觀念は、かなり廣い範圍に亘つてゐて、文藝美術とか、音樂とかいふやうなものも、此の範圍に入れても考へられない事はない、丁度かう云ふものも、實生活に直接の關係を持たない種類

であるが爲めに、一般には皆同じ範圍に入れられてゐるのであります、次に群書類從には、飲食部に入れられてゐて、これは茶が飲料である爲めからであう、これも勿論茶そのものは飲物に相違はないが、茶道と云ふものが單に飲物と云ふ丈けの事

では、明白に誰も納得の出來な
い事である、勿論以上はたゞ書
籍の分類上の便宜の爲めに簡單
に採られた方便ではあるが、吾
々にして見れば、茶道と云ふ獨
立した一つの項目を作つてほし
かつたと思ふのであります。
次に維新の當時、從來の舊い

ものは總て破壞せられましたが
その時、御多分にもれず茶道も
其憂目にあひ、以後は非常に衰
微を來たしました、明治五年に
京都の三千家が連名で、府廳に
差出した

『乍恐奉願上候口上書右者茶
道之意味奉歎願候』

と云ふものによると、當時いかにも役人達が、茶道に無理解であつたのに對し、よく辯明してある事が分るのである。

私共先祖千利休宗易茶道中興仕候其原意は、「忠孝五常を精勵し節儉質素を專に守り自分相應の家務に怠らず

治世安穩之恩澤を忘却致さず、貴賤衆人共に親疎之隔なく交會、子孫長久無病延命之天惠を仰ぐ祈術にして則一服點茶の規矩も仁義を旨とし　嚴密に手順を立て禮節を正敷し、座歩共に五體を亂さず、又約を違へず

誠心以て執行仕候事に悉皆
顯然御座候、依之舊來朝廷
始奉り御採用在之、下賤之
者も是を相學び、草庵にて
只在合せの器物を清く用ゐ
て一碗の茶を貴賤を論ぜず
貧福に拘はらず、禮儀を以
て親しむ筵を結びて質素を

示し……腹中を暖めて茶味の
良能を喫する爲に、粗末の
懷石を食し、和漢聖賢之教
事を感談致し、互に心底を
磨き候道に候處、」中頃より
世上の風儀に習候哉、珍器
を撰み山海之美味を集め、
思ひ〳〵に催を競ひ、自然

奢侈遊興の藝杯と流言に預
候事、寔に本意に背く次第
云々

右の如く、所謂道に背かざる
事を言上して、大に家業の寸暇
には入學して不苦御布告を出し
て欲しい等とある、この結果幾
分の納稅をして茶湯指南を免許

されましたが、よく役人の蒙を
啓くのに役立つた事と思はれま
す。

現今の茶道見方

これから申す事は、皆茶道の一要素には相違ないのですが、多くの人々はこの一要素をのみ見て、それが茶道の全體であるかの如く見られてゐるのです、又其の内に誤解されてゐるのもありますが、凡そかくの如き要素が茶道を代表せられてゐるこ

思ふものを順次申して見ませう

一、行儀作法

形に表れてゐる御茶の稽古が起居動作の整粛と云ふ事に役立つ事は自然の結果であるが、世の中の多くの人々には、之れを以て茶道第一の功能であるかの如くに信ぜられてゐる事を、往

往耳にするのであります。

性來粗暴な人や、事を處するに何時もあわてゝ、そゝつかしい人などは、御茶を稽古するとよいと云ふ事を常々その母親から言はれてゐたが、果して効果があつたと喜ぶ人、或は自分の娘や又下女等が、鉢などを始末

する時、何時もこはして仕方がないが、御茶を習ふ事になつてからはどういふものか、其扱ひ方が大變上手になり、其れから一つも破壞すると云ふ事がなくなつたとか、又は自宅の女子は、學校で運動許り熱心な爲か一寸も行儀作法を知らず、客室

へ出すやうな時でも、立つたなり襖の開閉をし、甚だしいのは兩手に物でも持つて行く時は、足で襖をけりあけるのには赤面した、早く御茶を教へて作法を實行さしたいと云ふ母親の歎聲も、私は聞かされた事がある。

かう云ふ行儀作法と云ふやう

な事や、又卑近な實用的の事に
役立つのみが、茶道の効能であ
ると認めらるゝ事は隨分と識者
の間にも多い事であつて、近頃
卽ち大正十五年六月一日の毎日
新聞に、倫敦雜話と題して、最
近向ふの土產話を書かれてゐた
中に——此雜話は大變面白く有益

な記事であつた——御茶の事が一
つ引合ひに出てゐた。
それは日本の新聞雜誌など、
よく花嫁花婿と題し、新婚夫妻
の寫眞が出て、新郎新婦の略歷
が、必ず書かれてゐる、大抵新
郎は秀才で新婦は才媛と定まつ
てはゐるが、その新婦才媛たる

處の藝は何かと云ふと、何々流の生花に堪能で、何々流の茶の湯の奥許しを持つてゐるとある併し考へて見ると、才媛たる新婦の特記するに足る技能が、投入れの巧さや、ふくさ捌きの鮮かさでは心細い事ではないか、から云ふお嫁さんを貰つて一生

夫妻唱和の生活が出來る男は、生來幸福な人間であらう……などと揶揄されてゐる。

之に對し英國では社會問題に興味を有つとか、考古學の造詣が深いとかいふ事を以てしてゐると、大に歎聲をもらしてあるが、之れは茶道に對する正しい

常識がない爲めに、世間に廣く
表はれてゐる婦女の稽古を見て
之れが茶道のかん所かと誤認せ
られた結果である事を、殘念に
思ふのであります。

茶の御手前の事は、別に申上
ぐる時もありませうが、之れは
茶道に對する訓練であつて、此

れによつて道に入るのである事
を知つて頂きたい、陸軍で兵隊
のやる右向け左向けが、如何に
上手でも夫で大將とはなれない
のと似てゐる、私ならば普通學
問のある以上、茶道に對する圓
熟せる趣味と理解を有する程の
婦人なれば、大に望ましい次第

であると申したいのである。

二、交會法

近來は茶道の大流行で、常に彼方此方で茶事が催されます、五客を一會としての方法や、又百人前後の大勢の客を招待して交會するのもある。實際に茶を稽古しない人々が、かう云ふ會

に招かれて行つての茶道觀は、
卽ち茶と云ふものは客を招待す
る方式のみが其本領であるかと
解するのである、勿論此の茶事
と云ふ事は、昔から茶道の一つ
の大きな仕事であるには相違な
い、自已にとつての最大の善美
を盡して人を招き、自已の抱懷

せる全人格を表章して滿足を得
ると云ふ事は、人生至上の享樂
の一つであつて、事重大である
のは言ふまでもない（これでも
茶道の全體ではないのである）
しかし其處迄は中々見て容易
に解らず、其內の御馳走振りだ
けを賞美して、茶の方の御馳走

の出し方や順序が、最も多く人に印象を與へてゐて、珍味佳肴を美味く料理して、人の食慾に應じて、よく杯盤の間に應答する事にのみ感心せらるゝ事が最も多くて、茶道とは宴會にはつてこいの上品な便利な、且つ經濟な方法であるとのみ思はれ

るのである。

嘗て藤原銀次郎氏は、宴會常道といふ題で東西兩時事新報紙上に茶の方法による宴會が最も合理的なもので、之れに非ざれば云ふに足らざる事を惹き、我等一されて世の注目を大に唱道同會心の笑をもらしてゐるが、

これを以て茶道窮極のものであるとは言はれないのである。

人をよぶには茶に限ると氣附かれてから、單に客を招いて饗應する事のみの一方便として利用するが、だん〳〵形式を反覆する內には、茶道の正しき理解なき爲めに、其餘興の方に力を

入れ過ぎて、結局墮落するものなどは屢次見聞する處である、しかし現在及未來に於て、民間の交會法式は固より、諸外國との交會に於ても、世界的日本としての地位を明かにし得る方式は、其形式や方法には猶尙創造の要はあつても、此茶道の

方式より出づるものを以つてする事は、最も必要の事であらうと信ずるのであります。

三、閑作業

富成り功遂げて業を後繼者に讓り、自分は樂隱居の身となつて後、其閑時を費す爲めに茶道は尤もふさはしいものであると又精神的方面の人々では、先づ哲學とか或は禪學とかに充分螯

雪の功をつみ、遂に悟道を得て
死生流轉の浮世の苦痛を脫却し
たる後の風流三昧、一碗の茶を
點てゝ我人共に其掬々たる清風
を味ふ事、これこそが茶人の境
涯であつて、其孰れかに非ざる
ものは、一寸茶道とは緣の遠い
者であると、此れらは何れも世

上の人々の考へらるゝ事である
つひ近頃も舊友に出遭ふた所
其人は自分も御茶に入りたい、
其必要も充分あり且つ其趣味も
大分解つて來てゐる、是非々々
やつて見たいが、何分多忙の爲
めに躊躇してゐる次第であると
物語つた、此の種類の話は隨分

到る處で聞く言葉であつて、先づ四十歳以前の人々の考へであるやうである、しかし之れも茶道とは單に末技的なものであつて、風流と云ふ事は素より主題ではあるが、あまり實際の心的生活なり、物的生活なりには關係する處が極めて少ないもので

あつて、先づ樂隱居の閑つぶしには何より持つてこいの仕事である位の考へから來てゐるものである、富もあり、修養もあり時間もある人が、何かを研究すると云ふ事は總てに於て理想的な事に相違ない、此の境遇で眞面目に勉むるならば、勞役的仕

事以外、大抵の事は成功するであらう。

茶のみが獨り此境遇に必適してゐる譯ではあるまい、しかし老人になつてからでは身に早くそひ難く、理解も遲いと云ふ樣な事よりは、實際の效果たる情趣盡きざる泉にひたると云ふ境

を味ふ事が淺い、それは所謂一苦一樂であつて、一方に繁忙なる生活をしてゐてこそ他方に悅樂を要求するのである、一方に繁しき心的生活をすればこそ、他方は純粹日本たる先天的の心底よりの融和を具する和らかき心的享樂を要求するのである。

私は、晝夜絶ねざる繁しきピアノの習練をする音樂の專門家を知つてゐた、その人は世界的とは云へ、異國的なる此の情趣の困難なる理解と練習との爲に絶ねず頭腦を酷使し、何がな心の底より休息慰安の出來る處を求めて、茶道の門を窺つた人で

あつた。

又或る有名なる富豪は、驚天動地の事業を企圖し、實行し、其成行を天に託したが、なほ自己は諸々の快惱を一盌の青茶を喫する事によつて、如何に自分の精神が蠢々たるかを熟視して ある、そうして次第々々に平靜

に歸せしめる事によつて、最後の斷案を決する人を知つてゐるかゝる例は隨所に散見する事であつて中々閑作業處の話ではなく、實に其人にさいつては一つの生命であるさ信じられてゐるのである。

表面から見て爲る事が、悠然

さしてゐるからさて、閑人閑作業さ云ふ觀察は當らない、各人の立場によつて、色々さ變化した働きさなつて現はれくるお茶は、何分忙しいから後日仕事を子息に渡してからやるものさ、云ふ樣に定まつて考へられてゐるのは、大に再考して頂きたい

のです。

四、誇示的表章

世界戰爭の爲めに、思はず我國は異常の富を齎らしたが、其影響は種々の方面に富を分配し茶も之れが爲めに非常の盛況を來たした。その當時は絶わず諸方で茶讌が催されたが。中には

何と考へても茶道的に意味を成さない盛大なる茶筵に出會ふ事が屢次あつた、それは自己の社會的地位なり名望なりを顧慮する事なしに、全く金錢の多寡を以て判斷せられたし、とより解する事の出來ないやうな道具類なり、建築物なりを見せる爲の

茶筵であつた。

用ゐなければならない處へ、適する物をよく用ゐた道具が、偶々非常な高價なものであつたと云ふならばそれはあるべき事で、却て其人の手腕を稱讃しようが、何もさるべき必要もなき處へ、色々いかに高價の物を羅

列されても、それは富の誇示と
よりしか思はれない、即ち千金
萬金を壁や床に並べて、人に見
せる譯にはいかない、其代りに
それだけの價を持つ、且つ人々
になほ高價の記憶の消ね去らな
いやうなものや、無意味に宏大
なる邸宅や庭園を見せるのであ

る、世人に多く茶とは金が第一
といふ誤解と反感とを植ゑつけ
る次第である。

誰れが見ても納得するやうな
地位なり名望なりの人が、普通
の場合一般より見て、高價の品
物を用ゐる事は先づ異議はない
筈である、此處はよく自巳を凝

視し自覺する必要がある、同時
に元伯が淀の殿樣の茶事に列し
た時、自分が嘗て淀の殿樣を招
いて饗應したと同程度の豆腐の
御馳走に接して、大に其非を諭
したと云ふ傳說は、以上の積極
に比し消極の差別はあつても、
その眞意に誇示的のものがある

ならば、それは同じ結果になる
と言はねばなるまい。

大體茶道は何事も身分相當と
云ふ事を以て、標語として來て
あるのであるが、これの標準は
中々六ケ敷い事には相違ない、
茶道的の修養が出來れば、それ
は相當考慮判斷の仕易いもので

あつて、仍で形式や方法をよく使用するならば、昔からの言葉通り貧富を論ぜず、貴賤を問はずして立會する事の出來るものである、然らば今日の複雜せる社會の思想からでも、此有無相通ずる美點を了解せられない事はあるまいと信ずるのである。

之れには尙茶道の思想を考察する必要があるから、それは次の道德の處に讓る事としますが、とにかく一般世人から見て、藝術的表章とは似て非なる誇示的表章を指彈せられて、茶道は全く贅澤物であるなどゝの考へを抱かれてゐる事は、少々ならざ

る範圍に亘つてゐるやうであつて、實に遺憾此上もない事であります。

五、學　問

此れから後の話は、形の無い事許りになり、其の各の一ツ一ツが大きな問題でもありますが紙數も少し多くなり過ぎたやうに思はれますから、可成簡單に切り上げる事に致します。

今日では茶道が學問であるとか、或は科學であるとかと思ふ人は少なく、寧ろ近世中頃より は茶人文盲と稱され、禪宗があの彪大な文字を有し乍ら、不立文字を看板にしたのにならつてか、隨分茶人も文字を用ひる塲合が多いに拘らず、文盲を表面

にかゝげて文筆には疎くとも、特別の免許を得てゐるやうな事になつてゐた、考へて見れば、これは茶道の形式と方法とのみに沒頭してしまつて、よくその源流に溯る事を忘れてゐる結果であらう。

かうした種類の事は他のもの

にも中々多かつたが、今日一般學問の發達に促されて、みな其元に復る事に勤められた、そうして其の初めての盛大な時を顧みると、茶道は實に學問として の使命を充分に果してゐた時であつた。

それは安土桃山時代を以て最

上とする、勿論社會の様子も今日とは大に異つてゐた時である からではあるが、茶道に勤める事は、其當時の學問を治める事であつた、茶道卽學問として秀吉の文教は企圖されてゐたが、中道にして逝つたのは誠に殘念な事でありました。

茶道の内容は各種諸般の事に
少からざる交渉をもつてゐる爲
に、今日では色々學問の資料と
しては隨分役立つてゐるやうで
ありますが、更に茶道の組織の
研究なり、文化史的研究なりが
多く起つて來る事を切望してゐ
るのでございます、今日では、茶

道が學問であると信ずる人は、
極少數でありますが、却て學問
とは縁のないものとして抛擲さ
れてゐる傾向があつて、貴重な
事實も未だ埋沒されてゐるもの
が少くないのを一入殘念に思ふ
のであります。

古筆物なども、茶道によつて

大に保存されたのが、近時假名
文字の研究に大に役立つて來た
のはその著しい一例である、其
他食禮、又それにおける盃事な
ども今では根元はすつかり忘れ
られてゐても、立派に茶道に面
影を殘存してゐる事等、その事
から文化史に貢獻する處など澤

山にあらうと思はれます、純學
問としては過去に左樣に信ぜら
れた事を申述べたのであります

六、道　徳

何事でも精神的方面に關する事は、みな最後は此道徳と云ふ事に結著さす傾向がありまして、これが唯一の賴りとなつてゐるやうです、國家は最高の道徳なりと云ふ講義を聽いた事もあり

ます。

茶道もこれにもれず、色々な形式や方法を以て、人の道たる道徳をのみ教へるものであると考へられてゐる事は、昔から今日に至るまで變りがないやうである、此の道とか道徳とか云ふ事は何かに付け、人の存在する

所には必ず附いてまはるもので
ありますし、我國は儒學の影響
が深い所から等、色々の原因か
らして一層その方に考へ付かれ
過ぎるやうですが、茶道は今日
の道徳と云ふ範圍の事のみを、
教へるものではないのでありま
す。

勿論道徳に反するやうな事は
一つもあり得べからざる事であ
つて、特に道徳を實行すると云
ふ方面では、著々之れを實行し
てゆく事を勧め、儀禮に關して
ゐる事などは、隨分其内容に多
くを持つてゐて、もとより禮に
始まり禮に終るものに相違はな

い。

茶道の內の行儀作法等も、此の內の現はれの一つであり、又初めに拔書した先代時分の口上書にもある通り、茶道は忠孝の道を行ひ、身を修め業を勤むる道に他ならぬことある通り、一步も我國の道德以外に出づるもの

では決してありませぬ。

其食事にしても懷石といふのは、單に時分時である爲めに飢を凌ぎ腹を暖めるに過ぎずとし節儉などに云ふ方でも實に一杓半杓の水をさへ心を付けて粗末にせざらん事を計り、一杯の水を用ゐれば一杯の水を返すこの

茶道の格言もあるのである、其他枚擧するに遑なき程、種々の事に就て、事の上下を問はず道徳の實行を成すべき處や、それを教へる處は多いのです。

此の世の中の總ての事が、その最後の目的が道徳にある——此考への批判はさておいて——

と考へるならいざ知らず、さうでなくて、もつと色々の目的や範圍があるならば、茶道も矢張り此範圍だけにあるものではないのでありまして、風流とか、數寄とか、眞とか、美とかみな茶道の中の事を云ひ表はしてゐるのである。

中には茶は道徳の中でも卑近な事で、今日で見ると無理と思はれるやうな事ばかりを固守してゐるものと、考へてゐる人も多いのであつて、野人の我等に縁のないものと敬遠する人々を見るのである。

茶の方では、無理な道徳的なごは少しも好まないものであつて、何處までも自然的である事を尚びます、其人の知つてゐる程度の普通の事を、ありのまゝに表現すればそれでよい、そこを何處までも洗練する、訓練によつて又自然に洗練されるのである、手や足を縛して四疊半に

押込むべき性質のものとは正反對であります、あまり形式にのみ捉はれ過ぎた時代の誤解でもありましよう。

しかし茶道が今日も傳へる道德には色々尊いものを殘してゐるのがあつて、今日での標準とは異つた處を見ると、今日にとつて却つて非常な價値を思ふものが往々ある、何事も今日は積極的慾望であるが、昔時は消極的慾望であつて、足らざるに滿足する事、卽ち御茶によく用ゐらるゝ掛物にも無事是貴人等は飽く事を知らずして手段を選ばざる貪慾者に之れをかけて、一

服進じたいのであります。

七、藝術

茶道は綜合藝術であるかと云ふ問ひは、往々若き眞摯なる人達から受ける質問であります、成程之れは目耳の感覺から口、鼻及び觸知感覺に及ぼして。同時に其美に陶醉すると云ふ點か

らしか思はれるのである、又知識ある人々も多く藝術であると信じてゐる方々も多いのである。一つの高尚なる藝術であるとは昔から認められてゐる處であつて——昔の事であれば、もとより他の音曲とか、舞踊とかには格段な差別的階級あるものと待遇

され、且さう信じてゐる——その奥儀に入る事は尋常の手腕では許されないものと思つてゐた。

實際茶筵の如き、多くの道具を自己の表象の手足とし、庭園から茶席から料理まで、一切自己の藝術慾を滿足せしめた處を我人共に觀賞するのであつて、

只其處に實用すると云ふ範圍に於て、總てのものが限られてはゐるが、茶道に關係する工藝美術の總てが展開されてゐる、その中で自己の意志感情を表象するのであるから、藝術である部分はもとよりあるので、見方によつて斯く斷ぜられるのは當然

でありましよう、又さうであればこそ、茶道の價値もある譯であることも思はれましよう。

さうしてこの茶道藝術は、表象の仕方が總て穩和で強烈な刺戟は一つもなく、此道に熟すれば熟する程、表理の方法は間接的となり、品物と表現する意志

との間には、想像をたごる無限の面白さがあつて、靜かに、しかし盡きざる愉快を感ずるのであります。

かく藝術的方面は元よりあるのであるが、しかし茶道は藝術なりと斷ずる事は少し早計であります、それは茶道全體は茶會

の様な場合のみではなく、又其の場合にても、なほ其他に同時に宗教的又道徳的の深い根抵をもつてゐて、又何處迄も實用と云ふ事を離れては存しない處があるからであります、實際生活の藝術化と云ふ事も高調する處ではありますが、茶道化すると

いふのは、そこにまだ〳〵私の言葉では云ひ表し得ないのですが、そこに相違は存するのであります。

美を美化すると同時に、醜を醜化すると申しましようか、若し美醜兩面に考へるならば、それは同時に二つ乍ら存在の理由

あらしめる處にある、拙を用ゐる斯道にありなどいふ語も、昔からあつて、拙をそのまゝ用ゐてそこに光彩を視るといふやうな、普通に藝術として視らるゝのと違つた處をもつてゐるのであります。

こゝで一つ茶道藝術として申

したい事は、今日普通に藝術と
して考へられてゐるもの、外に
なほずツと廣い範圍と云ふか、
反對の方面と云ふかに亘つて、
茶道には觀賞嘆美せらるゝ處が
ある事を知つてもらひたいので
す。

それは一例を道具に採れば、

茶道具の内でも所謂美麗なもの
や、形の正しく立派な美しいも
のやは、誰れも其美を觀賞し得
ます、しかし老練なる茶人等が
最も賞翫する處のものは普通の
人々の醜惡するやうなたちのも
のが多いのであつて、何故かか
る所謂美のないものを賞するか

と云ふ事であります。

例へて見ると、粟田燒や九谷燒の美麗な繪付の茶碗よりも、伊羅保とか、樂燒とかの一見美しくないものを尚びます、これは繪畫にしても書にしても、漆器にしても皆そう云ふ傾向があつて、今日では一個の茶入に莫

大な價を拋つ事を、一般世間からは驚きの眼を以て見られる事となる。

勿論今日の價格の事なぞは、日本從來の茶道具に對する色々複雜な歷史や變遷を述べなければ、中々一朝一夕には理解出來ませんから、此處では申上ぐる

事を止めておきますが、そういふ風に所謂嫌らしきものが尚ばれる所以は、卽ち茶道からの特別の教養から來てゐるものであつて、其の根本の思想は禪から來るのです。

是非の兩頭を斷じ、山川國土悉皆淨佛と云ふ樣な禪宗の思想は、皆茶道の上に不知不識の間に實際に現はれて來てゐる思想の基く處であつて、やがて道具觀賞の上に歷然認められたのである。

有名な大德寺國寶牧溪の栗柿は、此の思想に觸れ養はれてゐないと——もとよりそう云ふ思想

を前提として見るのではないが
―その驚くべき妙處を賞歎する
事は出來ないのである、この處
の妙味は、茶道具全般にあつて
それが爲めに横目には一つの下
らぬ割れ茶碗をば、枕頭におい
て朝に賞美し、夕べに感嘆して
盡きざる絶美を稱する理由は解

らないものであります。
茶人は誰もが皆、何れも器物
の傳來や歷史許りを買ふもので
もなく、さて又無意味に高き金
を下らぬものに浪費するのでも
なく、又單に少いから尊しとす
る純骨董的の考へからでもなく
實に第一義は卽ち其の品物の廣

大無邊の妙處を感得し、愛著の念止み難きものあればこそであつて、其他の要件は總て第二義以下である事を知つて頂きたいのであります。

此藝術に關しての事は、澤山に申述べる事が必要ですが、之れは何かの時に讓りましよう。

八、禪

私の知人が曾て仙臺の高等學校に在學中、其當時非常に座禪が流行してゐて、誰れも彼れも少し精神生活の事を考へる人々は、各地禪寺の有名な和尚に參禪してゐたものです、其人も別

に太した動機は何もなかつたが
あまり皆々が禪をやるから、自
分も心得てみたくなり、仙臺で
妙心派の禪寺の和尚に賴み、今
後參禪の許しを乞ふた。
　すると其の和尚は學校の勉强
のある傍で、參禪などは一向無
益であるから、それよりも拙僧

がもつとよい効果のある茶道を
教へよう、御茶を稽古せよと云
はれた。
　それから其和尚に就て、御茶
を覺え始めて、今は大に此道を
樂んでゐる次第であると云ふ事
です、之れはある場合に於ける
此和尚の作略でありましたらう

が、昔しから茶と禪とは不可離の關係があつて、禪を容易に習得する方法として、茶道が存在すると考へられました。

茶禪一味と云ふ言葉は、掛物にも器物にも隨所に見られて、誰れでもよく知つてゐる言葉です、そして中には茶道に入つて

は見たいが、禪が分らないからとても本當に茶道を會得する事が出來なからう、先づ禪をやつて悟入したら、軈て茶を習ふ事にすると、考へて居る人を隨分見受けるのであります。

然らば茶道は禪であるか、禪の修業を俗間でもやれるやうに

作つたものが、茶道であるかと
申しますと、それは違ふのであ
ります、茶道が成立して來た由
來を見ますと、其形式の色々の
點や、點前の具合や、一般の規
矩やらは固より禪宗のそれから
採つて來た部分は澤山にありま
す、且つ茶道が成立した場合は

丁度禪宗の思想が其の時代の精
神生活の何かに就けて、其背景
を爲してゐたから、茶
道も一層それに負ふ處が多く、
根柢には其思想の流れが盡きせ
ず流れてゐるのであります。
しかし總ての小川は、其流れ
を終にはある大川に合從せられ

る如く、禪宗も儒道も、ある時代を經てはみな大川たる時の思潮に合從せられるのであつて、茶道も成立の初期には、禪の思想から出て恰も禪の思想と同一のものゝ如きであつても、やはり時代の經過に伴れて、より大きな思想の大川へ流れ入りまし

た、そうしてゐる間に、やがて自分自身の本當の茶道として獨立する思想を創造したのであります。

今水を用ゐると云ふ事を考へるに、今日御茶の方では最もよく水を使ふのです、席に入る時は其度に必ず手や口を洗ひ、心

頭を清めてからするに定まつてゐます。

大體にこの水を使ふ事は、日本の舊い習慣であつて、禊などは元來は支那より起つた事を、我國にて大に日本化し、その物を清める思想が潔癖な國民性に適合し、習慣となつたものです

が、禪宗の方でも水を使ふ事は中々やかましいもので、朝起きて顏を洗ふにも水の使方に規矩があるのです。

茶の方での水の使ひ方は、之に倣つた處もあるが、又一般習慣として採入れた事もあつて、必ずしも禪からのみ敎へられた

のでは元よりないのであります
思想の方面でもかくの如き事は
往々に見出せるのであつて、初
めに書いた明治五年の歎願書に
も、禪宗の事は少しも書いてな
く、忠孝を基とした儒道の事を
力説してゐるのは、それを云は
なければ、當時の周圍の事情に

合はなかつた處もありましよう
が、不知不識の間にそういふ思
想を植ゑ付けられてゐたのであ
る。

蓋し我國の思想は、中世の暗
黒時代から一縷の光明として、
禪宗思想が武士道と合して盛大
となり次ぎに近世に至つては儒

教思想が根抵となる事になつたが故であります。

かくて茶道の思想は、禪や儒に加ふるに我國民性として深く長く養はれて顯在し、又潜在する思想をよく形の上にも發揮し又潜在的にも根柢をなして獨特のものが創造せられたのであり

ます。

常識としての茶道

以上八項目は狹い範圍ではありますするが、私が常に會ふ各種の人々の抱懷してゐられる、茶道に對する見解を擧げて見たものである、卽ちある人は單なる行儀作法とみる事から、最後には一宗教とまで見らるゝのであつて、勿論どれも皆其一要素を

視てゐられるには相違ないのですが、どうもよく中庸な本當の處をば、解して頂いてはゐないかの恐れがありますす。

又餘り考へすぎられて、何か一つの宗教とか、道德とかに依附しなければ止まないと云ふ場合も、見られるのです、しかし

只今茶道は然らば如何に定義し
如何なる道であるかと云はれゝ
ば、それは一寸簡單に表出する
事は困難であつて、なほ暫くの
時を要求しますが、大體以上の
べました、誤解に非ざるもの
要素を各々具へてゐるものであ
つて、廣く諸般の事に亘つては

ゐますが、その各に通じ、一貫
せる獨特の茶道なる一つの思想
を、かたち造つてゐるのであり
ます。

岡倉先生は、茶道を Teaism と
云ふ譯を付けてゐられますが、
一寸特色が出てゐるやうな處が
あります、而して同氏の曰く、

茶は支那では單なる飲料にすぎなかつたが、我國では生と云ふ藝術の宗教である、茶人は藝術の眞の鑑賞とは其藝術を生に影響せしむる處にある事を主張し彼等は茶室内で教養された高い程度の洗練を以て、日常生活を律して行くのであると書かれて

ある、誠に文藝藝術はもとより我々の生を豊富圓滿ならしめ、深き慰藉と生命を與ふるもので ありますが、茶道はかくの如き事と同時に、日常生活にそのまに具體的に觸れる處が主となります。

茶道を實際の生活の上にもつ

てきて、自己の程度に應じて物心兩生活を洗練の極致に至らしめんとする、卽ち生活其ものを藝術化し信仰化して、慰安と感激と信仰とを體現する實生活の實現、實行に重きを置くのである、そうして其洗練とは飽くまで純日本といふ事を基礎としたるものであつて、之れは今日までに日本人觀念となつてゐるもの、又今後大に日本觀念化せらるゝ無數の異國文明なども含まれてゐるのであります。

此純粹日本化と云ふ事は、中々微妙な事であつて、言はゞ外來の器物も日本化し、

を見つめる我々の精神も、ある時間の間に器物に融和して、眞に我物となるのであります。

茶道に用ゐる各種の外來器物などは。みなこの體驗を經て來たればこそ、一つの茶入、一つの茶碗を得る事には、如何なる名譽にも、財にも換へて獲得せ

んとする位になる迄の、殆ど本能的と云ふ程の愛著を生ずるに至るのであります。

茶道とはどんな事をやらうとするものか、と云ふ常識的の理解として、少くとも右に申し上げたやうな答へをしてみたいと思ふのである。

書いてから考へて見ますと、矢張り骨組み丈けで、もつとも一々實際の證據を出し、自分も滿足する程度にと欲望は盡きないのですが、此度は之れを以て一先づ擱筆致します、なほ私の頭の整理も出來ず、且つ文章も意のみ走つて盡し得ない不體裁を御許しください。

常識としての茶道の理解

（大尾）

千宗守宗匠は茶道三千家の一である、武者小路官休庵の家元で愈好斎と號されます

本書は元大阪時事新報紙上に連載したものでありますが、一册に纏めて發行せよと熱望される讀者が少なくないので、茲に攜帶繙讀の便を圖り、斯うした體裁によつて出版する事と致しました

茶道に對する世の誤解が、本書によつて解かれましたら、著者並に出版者の滿足はこれに上越す事はありません

編者

昭和二年六月一日印刷
昭和二年六月五日發行

不許複製

定價壹圓五拾錢

編者　渡邊源三　大阪市北區曾根崎上四丁目

印刷兼發行者　三島聰惠

發行所　大阪時事新報社

大阪市北區曾根崎上四丁目

振替口座大阪二三一九番

569
32